

8 二つの壁

—リマの社会構造に見る政治的ダイナミズムの淵源—

キーワード：ペルー、都市貧困、社会階層、社会構造、都市空間

富 田 与*

Two Ramparts: Political Dynamism Originating
from the Social Structure of Lima

Key Words: Peru, urban poverty, social stratification, social structure, urban space

TOMITA Atoo

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. はじめに | 4. 都市貧困層の形成 |
| 2. 社会構造の三重構造化 | 5. フジモリ政権と都市貧困層 |
| 3. 社会的隔壁内部の社会変動 | 6. 結 論 |

1. はじめに

ラテンアメリカの植民地起源都市には今でも城壁を残したところが少なくない。ペルーの首都リマにも、かつて、防衛を目的に建設された城壁があった。現在のリマ旧市街を囲っていたその城壁は、「庭園の都市」あるいは「太平洋の真珠」とされた当時のリマのイメージを「象徴」する景観であったばかりではなく、スペインの南米における植民地経営の拠点だったリマの社会構造を具象化するものでもあった。すなわち、城壁は、支配—被支配関係の境界として、副王を中心とした支配階層とそれ以外の被支配階層とを空間的に分離し、二分化した社会構造を具象化していた。

19世紀後半に進められた公園や交通機関等の都市機能の整備のなかで、城壁は植民地起源都市リマの「象徴」から近代都市リマの「障害」へと変質し、1872年に取り壊された。城壁の消失はそれまで城壁の内外に二分されていたリマの地理的空間の一体化をもたらした。ところが社会構造の二分化は解消されず、その境界には「社会的障

* 四日市大学経済学部・助教授

壁」とも言うべき目には見えない壁の存在が想定される。

城壁の撤去により地理的に一体化されたりマと、社会的隔壁によって社会的には二分化されたままのりマとのずれから、社会的隔壁の外側には、空間的にはりマであっても社会的には必ずしもりマとは言えない、いわば「りマであってりマでない」特殊な領域が形成された。そこには、社会的隔壁によりりマへの社会的参入をいったんは拒まれながらも、機会をうかがいながら待機する人々が活動してきた。

社会的障壁は城壁とは違いその内と外とを完全に分かつわけではない。誰に社会的障壁の通過を認め誰に認めないかは、社会的障壁内部での社会関係や時々の政策により決定されてきた。ところが、そうした内部の社会関係や時々の政策には、外部で待機する人々の影響力が少なからず作用していた。社会的障壁をめぐる社会的障壁内部と外部とのそうした相互作用がペルーの政治的ダイナミズムのひとつの淵源となってきた。

以下の本文では、そうした社会的障壁を挟んだ内外での相互作用を検討していくことにしたい。

2. 社会構造の三重構造化

2.1. 「りマであってりマでない」領域の形成

17世紀後半、りマは相次いで海賊の襲撃を受けていた。英国人海賊デイヴィス(Davis)の襲撃をきっかけに、防衛を目的とした城壁の建設が決まった。アドベ(Adobe：日干しレンガ)と石灰で作られた城壁の建設は1684年6月に始まり、1687年12月まで続いた[Pacheco 1985: 241-242]。その後およそ200年間にわたり城壁はその内側と外側とを分割し、2つの空間では互いに異なった現実が展開していた。

日系人の歴史家イワサキは、露天商(Ambulante：アンブランテ)の歴史に関する論文の中で、「りマが『庭園の都市』や『太平洋の真珠』であったことは一度もない。(中略)現実のりマ社会は、旧家の邸宅や大きなバルコニーが立ち並ぶような社会ではなく、暴力とゴミにまみれる町外れへと拡大したアンブランテと移住者の社会だった」[Iwasaki 1989: 104]とりマを鳥瞰したあと、城壁の内側だけではなく「庭園の都市」や「太平洋の真珠」だったかもしれない、としている[Ibid: 145]。

そこで示されたのは、美しさだけが強調されたりマのイメージと現実のりマとの乖離であり、「城壁」、「庭園の都市」、「太平洋の真珠」というイメージの連関は、あくまでも城壁の内側というごく狭い限られた空間と結びついたもので、城壁の外側の大き

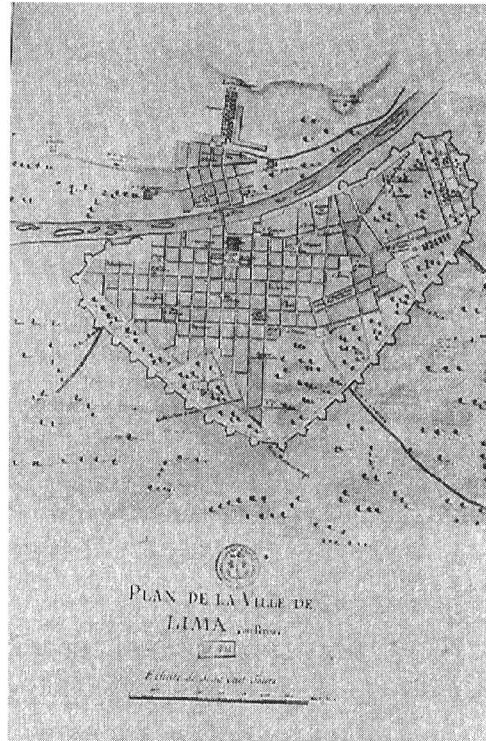


図1 19世紀のリマ
(増田・柳田 1999: 89)

な空間にはそうした美しさとは全く別の「暴力とゴミにまみれた町外れ」という現実があったということである（図1）。

リマの近代化に伴う城壁の撤去は、「庭園の都市」であり「太平洋の真珠」であったリマと「暴力とゴミにまみれた町外れ」との地理的一体化をもたらした。ところが、防衛の要であった城壁が撤去されてから8年後、リマは外敵からの侵略に脅かされた。1879年に始まり1883年の休戦協定成立まで続いたチリとの「太平洋戦争」である。

リマの攻防戦は1880年末に始まった。この時、ペルー側はリマの周辺に3重の防衛線を敷いた。リマ旧市街から最も離れたサン・ホアン（San Juan）の防衛線、中間のミラフロレス（Miraflores）の防衛線、そして、かつての城壁の場所とほぼ一致するリマ旧市街周辺の防衛線の3つである（図2）。この布陣は、リマの城壁撤去による地理的一体化と社会的障壁の残存による社会的二分化とのずれを具象化していた。

チリ軍は海側からリマに向けて侵攻し、1881年1月にミラフロレスの防衛線でペ

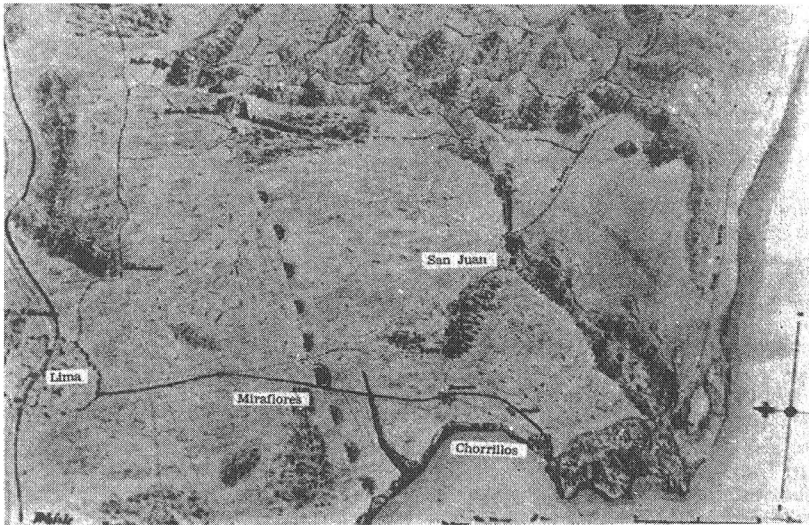


図2 「太平洋戦争」でリマ周辺に築かれた防衛線
(Valcárcel, C., Docafe, E. et.al. 1991: 205)

ルー軍と衝突した。この「ミラフロレスの戦い」でチリ軍はペルー軍を破りリマを軍事的に制圧し、首都のリマは1884年8月までチリ軍により占領された [Valcárcel et al. 1988: 201-215]。城壁の場所から離れたところに築かれたサン・ホアンの防衛線とミラフロレスの防衛線は、ともにその内部にイワサキの言う「暴力とゴミにまみれた町外れ」を取り込んでいた。「ミラフロレスの戦い」は、「庭園の都市」や「太平洋の真珠」とされた城壁内部のリマ旧市街への攻撃ではなく、そこから離れたこの「暴力とゴミにまみれた町外れ」での戦いだった。

つまり、ミラフロレスの防衛線がリマの死活線であったことを考えると、このとき既にリマの境界は城壁の場所には無く、リマの空間はかつての城壁の外部にまで広がり、城壁により分かたれていた2つの空間の一体化が進んでいたことになる。ところが、こうした地理的一体化はミラフロレスの防衛線までであり、その外側のミラフロレスの防衛線とサン・ホアンの防衛線に挟まれた領域は、サン・ホアンの防衛線により「守るべきリマ」とされながらも、その陥落がリマの制圧を意味するわけではない、まさに「リマであってリマでない」領域となっていたのである。

2.2. 社会的隔壁が分かつもの

太平洋戦争から1世紀以上が経過した1987年、文化人類学者のゴルテは『不法占拠者たちのトロイの木馬』 [Golte 1987] と題する著作を発表した。ゴルテが描いたリマ

の1980年代は、民政移管とともに始まった。1980年の民政移管は軍政から民主政への移行であると同時に、普通選挙の導入による政治的平等の実現でもあった。しかし、そうした政治的平等とは裏腹に、1980年代は所得格差が恒常的な政治的争点とされた時代でもあり、実際、リマでは都市貧困層が増加し、その主な経済活動であるアンブランテなどのインフォーマル・セクターも急速に拡大していた。

不法占拠区の住民の多くは地方からリマへの移住者とその子孫で、在来の「リメーニョ」(Limeño:リマ人)のなかにはそうした新住民に対する差別意識があり、同じリメーニョとは認めていなかった。ところが、在来のリメーニョが気づかないうちに、そうした新住民たちは次第に在来のリメーニョとリマに関する問題意識を共有するようになっていた。都市化のなかで多数派を占めるようになった不法占拠区の住民と在来のリメーニョとが共有するリメーニョとしての問題意識は、最終的に、多数派である不法占拠区住民のより大きな影響を受けることになる。古代ギリシャの詩人ホメロスの詩を引用した「トロイの木馬」というゴルテの表現にはこうした含意がある。

リマでは、不法占拠区住民のような地方からの移住者に対する呼称として「チョロ」という言葉が一般的に用いられている。「チョロ」が侮蔑語として使われる時には、日本語の「田舎者」に近い含みがあり、外見から分かる特徴を捉えて使われることが多い。この「チョロ」に都市貧困層という経済的な性格が付加され、しかも侮蔑的な印象を幾分か拭い去ろうとしたところに「庶民階層(Clases Populares:クラセ・ポプラル)」という別の表現がある。「インフォーマル・セクター(西語 Sectores Informales:セクトル・インフォルマル)」という表現もこれに近い。

研究者やマスコミの用語から援用されたと思われる「庶民階層」や「インフォーマル・セクター」というこれらの表現は、1980年代後半にはいずれも日常語として定着しており、そうした人々が自らを「庶民階層」あるいは「インフォーマル・セクター」と表現することも珍しくはなかった。「チョロ」、「庶民階層」、そして「インフォーマル・セクター」は、ゴルテの言う「トロイの木馬」を構成する人々を示す呼称であり、そうした言葉が日常語として定着していた1980年代の状況は、「在来のリメーニョ」とそうした言葉で指し示される人々との差異が双方で明確に意識されていたことを示している。

同じ1980年代の状況を、文化人類学者のマトス・マルは、その著『民衆の氾濫と国家の危機』[Matos Mar 1988]の中で、「フォーマルなペルー」と「周辺化されたペルー」という一組の対立構造から説明しようとした。ゴルテの言う「在来のリメー

ニョ」は、ここでは「フォーマルなペルー」に対応し、「チョロ」、「庶民階層」、そして「インフォーマル・セクター」等により構成される「トロイの木馬」は「周辺化されたペルー」に対応する。つまり、「フォーマルなペルー」＝「在来のリメーニョ」と「周辺化されたペルー」＝「トロイの木馬」（「チョロ」、「庶民階層」、「インフォーマル・セクター」）との間には境界線が存在することになり、これが社会的障壁に相当する。

ラテンアメリカの多く国々は、1980年代、「失われた10年」と呼ばれる深刻な経済危機に見舞われた。特に、1980年代後半のペルーでは、ガルシア政権（1985-1990）下で経済危機が深刻化し、それが社会的隔壁の存在をより強く意識に上らせていた。社会的障壁の存在は、新たな開発政策の模索のなかでも注目された。

1986年、経済学者のデ・ソトは、『もうひとつの道』[De Soto 1986]の中で、インフォーマル・セクターが拡大してきた原因をペルー国家が持つ許認可制度を柱とする「重商主義」(Mercantilismo) 的性格に求めた。ここで言う「重商主義」とは、「国家により特権を与えられた民間のエリート層に依存する、許認可主義国家的な政府に基礎を置くシステム」のことを意味している。

都市化によるリマへの移入者の急増は、新規参入者と既存の企業化層の競争を激化させた。そうした新規参入者を排除するためにさまざまな許認可制が利用され、そこに生まれた既存企業家と政府（官僚）との緊密な関係が「重商主義」を構成していた。つまり、社会的隔壁の外側での人口急増に対抗し自らの利害を守るため、既存の企業家と政府は社会的隔壁の外部から内部への通過をより困難なものへと変化させたのである。

その結果、社会的隔壁の外側では自己雇用の必要が生まれ、インフォーマル・セクターが拡大した。デ・ソトは、政府による許認可を簡略化することで社会的隔壁を通過しやすくし、インフォーマル・セクターの活力を社会的隔壁の内側に接木することで全体の経済的活力を高めようと考えた。こうしたインフォーマル・セクターの「フォーマル化」政策はガルシア政権末期に部分的施行され、政府機能の縮小による「重商主義」の排除が着手された。

2.3. 社会構造の中の社会的隔壁

ここまで見てきたように、リマ社会は、まず、「周辺化されたリマ」と「フォーマルなリマ」に分けることができ、更に、「重商主義」が卓越する「フォーマルなリマ」には、政府や官僚機構を構成する「保護者」と企業家などの「被保護者」という下位

区分が存在する。

そこから、全体として3つの同心円により構成される三重構造をリマの社会構造として導くことができる [富田 1997]。こうした三重構造を構成している三つの階層を、外側から、「周辺層」、「中間層」、そして「エリート層」と呼ぶことにしよう (図3)。

この三重構造の構図は、「太平洋戦争」の時に築かれた防衛線の構図とも一致している。ペルー軍が防衛すべき首都リマの地理的境界をなしていたサン・ホアンの防衛線は、リマの最も外側の境界を示す周辺層の外縁と一致する。また、その陥落がチ

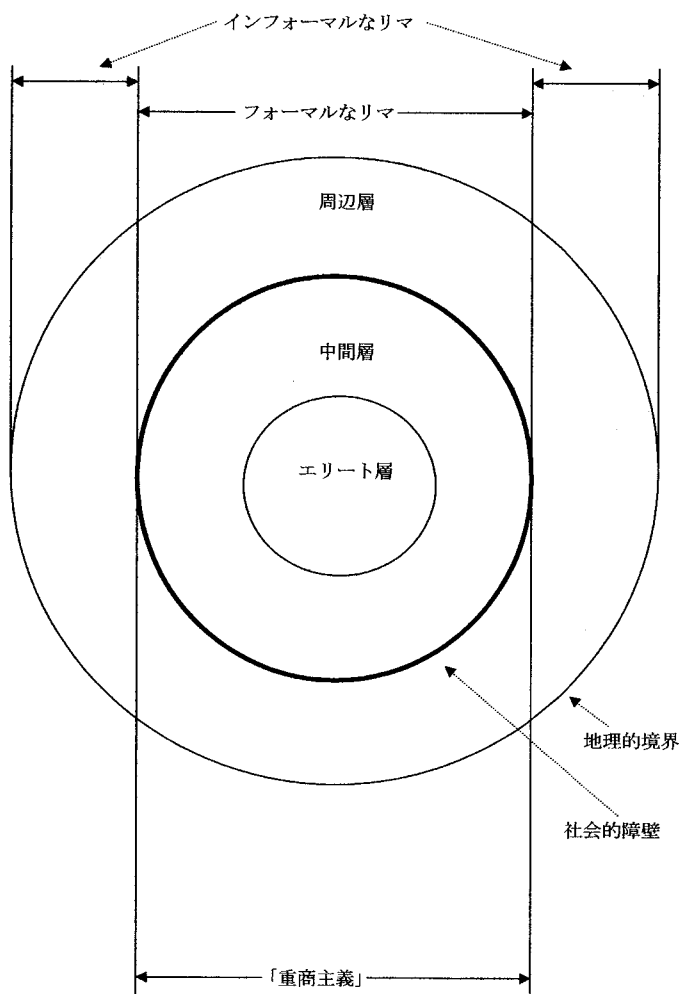


図3 リマ社会の三重構造モデル

リ軍によるリマの制圧を導いたミラフロレスの防衛線は、周辺層と中間層との境界すなわち社会的障壁と一致し、結局、サン・ホアンの防衛線とミラフロレスの防衛線とに挟まれた「守るべきリマ」でありながら、そこが陥落してもリマの陥落とはならない「リマであってリマでない」領域は、周辺層と一致する。そして、リマの防衛線は、社会的障壁の内側にある中間層とエリート層との境界に一致する（図4）。

こうした「太平洋戦争」での三重構造とよく似た構図は、1980年代から1990年代初めにかけて続いた「ペルー内戦」の時にもあった。「ペルー内戦」とは、1980年に始まった反政府組織「センデロ・ルミノソ（輝く道）」によるゲリラ戦で、アンデス南部の山岳地帯を起点とした内戦は、中部山岳地帯やアマゾン地域に拡大し、1987年ごろ

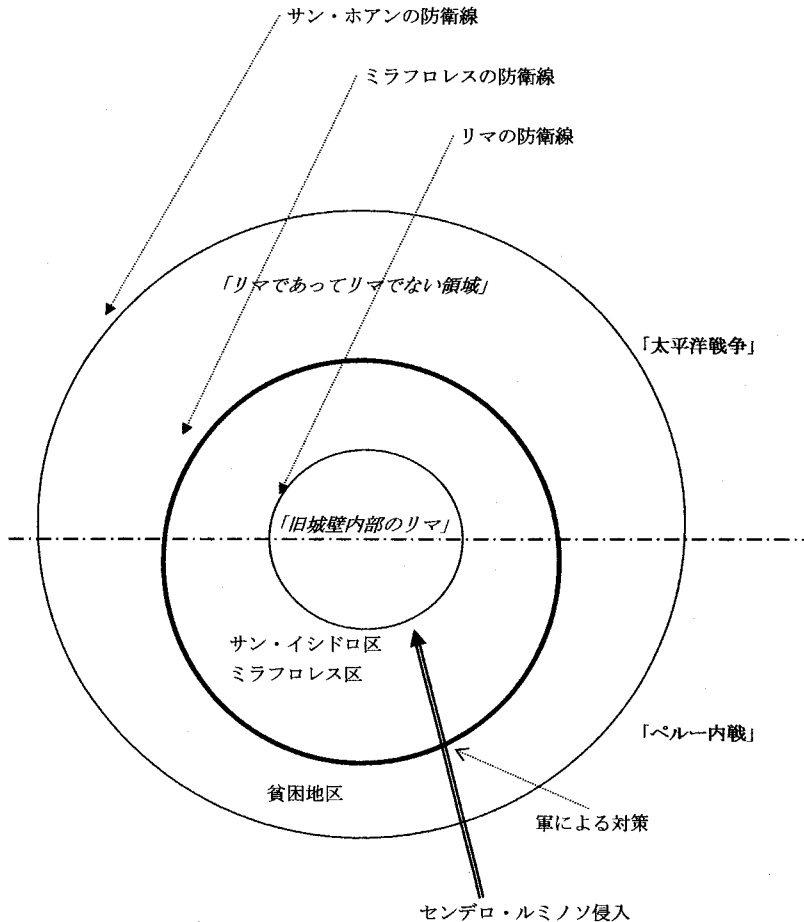


図4 「太平洋戦争」および「ペルー内戦」に見る三重構造

から戦線はリマ首都圏にも及んでいた。

センドロ・ルミノソは、リマ周辺の主要街道での強制ストなど労働組合への浸透を図ると同時に、不法占拠区や不法占拠区起源の貧困地区に拠点を築くようになった。1980年代末には、リマ周辺の貧困地区ではセンドロ・ルミノソやその下部組織による落書きがいたるところに見られた。ところが、その頃には軍を中心とした大規模な反政府組織対策が採られることはなく、そうした対策が採られたのは、サン・イシドロ (San Isidro) 区やミラフロレス区など中間層が多く住む住宅街やそれに近接した商業施設などでセンドロ・ルミノソによる爆弾テロが頻発するようになった1990年代に入ってからだった。

「太平洋戦争」ではサン・フアンの防衛線とミラフロレスの防衛線とに挟まれていた「リマであってリマでない」領域は、この「ペルー内戦」では、センドロ・ルミノソに侵入されながらも軍による積極的な対策には結びつかなかったリマ周辺の貧困地区に相当している (図4)。この貧困地区は、まさに、「チョロ」、「庶民階層」あるいは「インフォーマル・セクター」といった人々の活動領域と一致し、そうした人々が社会構造上の周辺層を構成している。

3. 社会的隔壁内部の社会変動

3.1. オリガルキア体制

1968年のクーデターで成立したベラスコ (Velasco, J.) 政権 (1968-75) は、「ペルー革命」と呼ばれる農地改革などの左翼的な改革を相次いで実施した。その結果、少数の大土地所有者が政治、経済的権力を掌握していた「オリガルキア (Oligarquía) 体制」が解体された。

オリガルキア体制の骨格は、グアノ、綿花、サトウキビなどの一次産品輸出がペルー経済を支えた19世紀後半に形成された。海岸地方の農業地帯では企業的農業経営の拡大とともに土地の集約が急速に進み、オリガルキアを構成する大土地所有者層が生まれた。リマなどの都市では海外との強いつながりを持った輸出業や金融業が成長し、大土地所有者層はそうした業種も掌握するようになっていた。そうした大土地所有者層の影響力は、1895年のピエロラ (Pierola, N.) 政権 (1895, 1903-04) から1914-15年の混乱期を挟んで1919年まで続く「貴族的共和制」の時代を通じて政治にも波及した。

フランスの社会学者ブリコーは、その著『ペルーにおける権力と社会』[Bourricaud

1989] の中で、こうした大土地所有者層の在り方を、中心となる拡大家族とそのクライアントにより構成される「クラン」(Clan) の集まりであるとした [Ibid: 49-56]。そうした「クラン」は、親族関係とパトロン・クライアント関係のネットワークを通じて、農業、商業、金融業、そして後には製造業といった経済の多くの部門で多面的寡占支配を形成し、更に、既存の政治勢力を取り込みながら政治と経済の両方にまたがるオリガルキア体制を作ったのである [Ibid: 56-64]。

こうしたオリガルキア体制は、リマの社会構造のなかでエリート層と中間層との社会関係を規定するものでもあった。オリガルキア体制下でエリート層を構成していたのは、およそ 30 の拡大家族であり、そのおよそ三分の 2 は、独立後にドイツ、イタリア、あるいは他のラテンアメリカ諸国からペルーへ移住したものだった [McClintock 1999: 314]。中間層は、そうした拡大家族を中心とした「クラン」にクライアントとして参画した人々で構成された。オリガルキア体制では、エリート層と中間層はこうした「クラン」の集合体として存在しており、「クラン」の集合体の外縁が社会的隔壁を構成していた。

オリガルキア体制下の輸出経済によってもたらされた経済成長は労働力需要を生み、大規模な農場が集中した海岸地方や企業活動の中心となったリマに向かう国内移住の増加をもたらした。ところがオリガルキア体制下では、そうした移住者が社会的障壁を外側から内側へ通過することは認められなかった。その結果、そうした移住者の中から生まれたホワイトカラーや製造業部門などでの新興企業家、および低所得者層は社会的隔壁の外側に残され、そうした人々により周辺層が構成された。

国内の最終消費財需要の高まりから影響力を伸ばしてきた製造業部門などでの新興企業家や、近代化に伴いその労働力需要が高まったホワイトカラーは、周辺層に留まることを嫌い社会的隔壁への侵入を企てるようになった。そうした新興企業家やホワイトカラーは、次第にオリガルキア体制に対抗する勢力となり、実際、オリガルキア体制は周辺層から生まれたこうした勢力により解体された。

3.2. オリガルキア体制から重商主義へ

1950 年代以降の急速な都市化は周辺層の中でも特に低所得者層の増大をもたらし、リマ周辺では不法占拠区の拡大が社会問題化していた。第二次プラド (Prado, M.) 政権 (1956-62 年) はそうした問題を解決するため「農地改革・住宅委員会」(Comisión de Reforma Agraria y Vivienda) を組織した。この委員会は、リマへの人口流入を抑制することを目的とした地方での農地改革や [渥野井 1995: 39]、「バリアダ」(Barriada:

不法占拠区) 住民の自助による住宅建設などを軸とした住宅政策を提言した [Calderón 1990: 30-38]。

この提言では、「バリアダ」という新たな社会的区分が一般の公共サービスとは別の特別な政策を必要とする対象として明確に位置づけられた。これにより、周辺層の中で新興の反オリガルキア勢力を形成していた製造業などの新興企業家やホワイターは、その他の低所得者層と政策的に分節化された。

エリート層および中間層の利益を守りオリガルキア体制の存続を狙った第二次ブラド政権は、1930年の結党以来一貫して労働運動を支持基盤としてきたアブラ党 (APRA: Alianza Popular Revolucionaria Americana) に合法性を与え、オリガルキア体制側に取り込んだ。1962年の選挙では、その決選投票で、アブラ党の保守化により改革派の人民行動党から立候補したベラウンデ (Belaúnde, F.) が劣勢に立たされた。軍内部に根強くあったアブラ党への反発やオリガルキア体制解体の遅れに対する懸念から、軍は第二次ブラド政権の任期終了直前にクーデターを起こした。

軍の強い影響で翌1963年に行われた選挙では、伝統的な反オリガルキア勢力である農民と新興の反オリガルキア勢力であるホワイターとの支持によりベラウンデが当選した [McClintock 1999: 321-322]。しかし、第一次ベラウンデ政権 (1963-68年) は、アブラ党の保守化により、議会内では少数派にとどまり、議会の抵抗からオリガルキア体制解体に向けた改革は、遅々として進まなかった。こうした行政府と立法府との対立による改革の遅れが、1968年のクーデターに道をつけた [遅野井 1995: 43-49]。

1968年、クーデターにより成立したベラスコ政権は、1969年2月のスタンダード石油系子会社 IPC の接収に始まる外国企業の国有化や、同年6月の農地改革など矢継ぎ早に改革を実施した。こうした改革の多くは資産の格差を是正しようとするものであり、土地のような主要な生産要素の占有を権力の源泉としたオリガルキア体制にとって、そうした改革の実現は権力の源泉の喪失を意味した。

ところが、1958年の「工業振興法」に始まった工業化の流れにより、それまでの資産の格差に代わって、こんどは所得や投資における格差が社会関係やそれに伴う権力関係を規定するようになった。また、「ペルー革命」の改革や「工業振興法」による輸入代替工業化政策は、政府による経済への介入を増大させた。そうした新しい状況に対応して卓越するようになった社会関係が「重商主義」である。

3.3.「重商主義」

デ・ソトによると、「重商主義」の制度的な特徴には、「既存のフォーマルな企業へのアクセスの困難さ」、「法的規制の煩雑さ」、「公私両部門での官僚化の進展」、そして「同業者組合による規制」、という4点がある [De Soto 1986: 253-259]。植民地時代にスペインから移植されたもとの重商主義は、ペルーの独立によりいったん衰退した。デ・ソトの言う4つの制度的特性を備えた「重商主義」は、オリガルキア体制下で始まったリマの都市化のなかで再編されたものである。「重商主義」の4つの制度的特徴は、政府が許認可制を通して企業家に実質的な保護を与え、同時に、そうした政府による保護を前提とした経営が既存企業家のなかで一般化し、企業家は政府や官僚に強く依存することになることを意味している。

急増したリマへの移住者の中から現れた新興企業家に対抗し、既存の企業経営者たちは自らの利益を守るために、許認可制を通じ政府や官僚機構との間にパトロン・クライアント関係を作った。政府や官僚機構を「保護者」(パトロン)とし既存のフォーマルな企業家たちを「被保護者」(クライアント)とするそうしたパトロン・クライアント関係では、パトロンから与えられる許認可によりクライアントは新規参入者との競争から保護される。一方、パトロンである政府や官僚機構の側では、許認可にかかわる法律や手続きを複雑にすることで自らの権威を強化することができた。

「ペルー革命」は、「クラン」というオリガルキア体制下でのパトロン・クライアント関係を解体した。ところが、今度は、当時既に形成され始めていた「重商主義」下でのパトロン・クライアント関係が卓越することとなったのである。そこでは、それまでの「クラン」に代わって「経済グループ」と呼ばれる大企業の周辺に作られた企業集団がエリート層および中間層におけるパトロン・クライアント関係の大きな軸となった [Castillo 1990: 236]。

こうしたエリート層と中間層の間の「重商主義」的なパトロン・クライアント関係が、社会的障壁の新たなあり方を規定し、そこでは低所得者層の外部から内部への通過が阻害され、そうした人々が周辺層に滞留しその数は急増した。その結果、リマ首都圏における所得格差はペルー全体の所得格差よりも大きくなり [Cuánto S. A. 1990: 732]、低所得者層は自分たちが持つ安価な労働力に頼り自ら小零細な企業を作るようになった。それがインフォーマル・セクターである。デ・ソトがその経済的活力にペルー経済の活路を求めたインフォーマル・セクターは、こうした低所得者層の自助手段として拡大してきた。

4. 都市貧困層の形成

4.1. インフォーマル・セクターの拡大

1960年代以降、インフォーマル・セクターは都市人口の増加に並行して成長した。都市化の中で強化された「重商主義」は、都市人口の増加による需要拡大と許認可制度による供給規制とのあいだにギャップを生じさせた。同じ時期に進められた輸入代替工業化政策も、それに伴う最終消費財の輸入規制により需要と供給のあいだにギャップを生じさせた。インフォーマル・セクターはそうしたギャップを埋めるかのように拡大していた。

そうしたギャップが最も大きかったのが小売や公共交通だった。小売やバス、タクシーなどの営業は政府や自治体による強い規制がかかり、また、最終消費財の輸入規制は低品質な商品への需要を増加させ、財政赤字や自動車の輸入規制により公営バスの整備不全は深刻なものとなっていた。その結果、インフォーマル・セクターは、まず、低品質な商品を扱うアンブランテなどの小売業と無認可タクシーなどの公共交通部門で拡大した。

インフォーマル・セクターの代表的業種ともいえるアンブランテの歴史は古く、19世紀後半にはすでに相当数のアンブランテがいたことが知られている。しかし、その増加が顕著となったのは1960年代以降のことであり、特に70年代後半以降大きく増加した。リマ市に関する調査によると、76年には58,284だったアンブランテの数が85年には84,327に増えている [Alonso 1989: 33]。また、露天商や販売棚が集中する市民市場などのマーケット・プレイスの数の変化は、インフォーマル・セクター人口が増加した1978—79年を最後のピークとして、以後増加率は減少していた [Instituto Libertad y Democracia 1989: 48]。これに続いたのが公共交通部門だった。

交通部門でもインフォーマル・セクターの存在は大きく、リマ首都圏の交通機関は、都市化以降、インフォーマル・セクターが一貫して主流であった。特に、マーケット・プレイスの増加が一段落した1978—79年を境に増加が加速し、1984年のリマ首都圏に関する調査では、バス等で使われている自動車の数では全体の91%が、また、操車場の数では94%がインフォーマル・セクターに属していた [Ibid: 61]。

輸入代替工業化政策の長期化は、国内のフォーマル・セクターでの製造業にも停滞をもたらし、ペルー全体の需給ギャップを急速に拡大させていた。1980年代後半には高インフレが常態化し、安価で低品質な消費財への需要が高まった。安価な労働力と

低水準の資本に特徴付けられるインフォーマル・セクターには、安価で低品質な最終消費財を生産する製造業が多く、そのためこの時期には、インフォーマル・セクターの製造業も拡大を始めていた。

このように「重商主義」による社会的隔壁は、低所得者層を周辺層に留め置く一方、周辺層に留め置かれた低所得者層にはその「経済活動空間」(Niche: ニッチ)を用意していた。インフォーマル・セクターはそのニッチで生まれ成長した。デ・ソト等が1982年に行ったりマに関する調査によると、インフォーマル・セクター就労人口の構成は商業52%、製造業26%、交通12%、そしてサービス10%となっていた [Chaves 1988: 73]。これは、「重商主義」と輸入代替工業化により作り出された、当時の、経済的ニッチの分布を示している。

4.2. 「生き残り戦略」の形成

インフォーマル・セクターは、もともと都市貧困層が所得を確保するための戦略であった。これに対し、一定の消費水準を維持しながら家計支出を抑えていくために講じられたのが「生き残り戦略」(Estrategia de Supervivencia)である。ここでいう「生き残り戦略」とは、住民の中から内発的に発生してきた生存維持の方策の総称であり、その起源は移住前の共同体における共同労働に求められる。こうした「生き残り戦略」は、比較的早い時期から政策に取り込まれてきた。第二次プラド政権下で「農地改革・住宅委員会」が提案した自助によるバリアダの住宅建設は、その早い例のひとつである。

農村から都市への移住により、それまで生活必需品を直接生産していた住民は市場を介した経済活動に巻き込まれた。しかし、インフォーマル・セクターの拡大に見られるように、「重商主義」の社会的隔壁はフォーマルな労働市場への新規参入を強く規制し、その結果、移住者の所得は低迷することとなった。ところが一方で、社会的隔壁が情報や移動の障害となることで、市場の不完全性が強化され、同一商品に対する価格のばらつきも大きかった。

こうした状況下で、都市貧困層の女性を中心に、より安価なものを購入することに時間をかける行動様式が形成された。また、自助による住宅建設に見られるように、都市貧困層の中にはインフラ整備の遅れを自ら補おうとする自発的な活動が早い時期から存在していた。そこでは、共同労働による市場外での互酬的労働交換の有用性が再発見され、当面の必要を充足するための組織的活動が常態化した。

「消費に投入される時間の増加」と「組織的な互酬的労働交換」という2つの行動様

式が結びついたのが「コメドル・ポプラル」(Comedores Populares: 民衆食堂)だった。コメドル・ポプラルは都市貧困層の女性を中心とした共同調理の仕組みで、1979年末、リマ東部のエル・アグスティノ (El Agustino) で始まった。子供たちの栄養摂取に危機感を抱いた主婦層が、地域のカトリック教会の協力で第一号のコメドル・ポプラルを立ち上げた。

これをモデルとして、類似のコメドル・ポプラルが相次いで設立され、その数は、1980年代の「失われた10年」の中で増加していった。1986年の数字で、591のコメドル・ポプラルがリマ市内で活動していたが、この内63%は1984年から86年にかけて設立されたものであった [Huaman 1989: 146]。更に、フジモリ政権が構造調整に乗り出した1990年8月以降、リマのコメドル・ポプラルの数は3000箇所近くにまで急増した [富田 1993: 4]。

コメドル・ポプラルは、政党などによる政治的介入を意識的に拒否しながら、一方ではNGOや外国政府からの援助の受け皿ともなってきた。そうした援助の対象は都市貧困層であり、社会的隔壁の存在により周辺層に留め置かれることはそうした援助の対象となることを意味していた。つまり、コメドル・ポプラルは、社会的隔壁の存在から導かれた「生き残り戦略」という行動様式と、援助という周辺層に対する外部からの働きかけが交錯したところで生まれていたと見ることもできる。

5. フジモリ政権と都市貧困層

5.1. 開かれた木馬

民政移管から10年後の1990年、政治的にはほぼ無名であったフジモリ (Fujimori, A.) が、庶民階層の強い支持を得て大統領選挙に当選した。この頃までには、都市貧困層が持つコメドル・ポプラルのような互酬的關係によるネットワーク形成やインフォーマル・セクターのような企業家創出という機能は形を整え、都市貧困層に属する地方からの移住者が、「リメーニョ」としてゴルテの言う「トロイの木馬」になっていく過程も完成に近づいていた。1980年代に日常語として定着した「庶民階層」は、リマにおいて文字通りの「庶民」として認知されるようになっていたことを示している。この選挙は、「リメーニョ」となった「トロイの木馬」が開かれた瞬間だった。

大統領に就任したフジモリは、政権発足後間もない1990年8月、価格統制下にあった主要生活必需品の大幅な価格上昇を含むドラスティックな経済パッケージを発表した。「フジ・ショック」と呼ばれるこのパッケージは、一般に「ショック療法」と総称

されるインフレ抑制を主眼とした総需要抑制策のひとつだった。

大統領選挙に先立ち、リマ市民に対して行われた世論調査では、「ペルーにおける問題は何か」（複数回答）という問いに、全ての所得階層が「インフレ」を筆頭にあげた。一方、インフレ抑制策として「ショック療法」を行うべきか、あるいは漸次的調整を行うべきか、という問いでは、所得階層の上層は「ショック療法」を支持し、下層は漸次的調整を支持した。また、「ショック療法」の実施とインフレの継続のどちらがよいかという問いでは、下層はインフレの継続の方を選択した [Apoyo S. A. 1990: 28-29]。

この調査結果は、インフレが社会的隔壁の内外に共通した「リメーニョ」としての問題意識であったにもかかわらず、それへの対処方法については社会的隔壁の内外で異なる考え方があったことを示している。この調査結果に基づくならば、「フジ・ショック」は所得階層の上層が属するエリート層や中間層においては支持されるものの、庶民階層を含む下層が属する周辺層においては支持されないことになる。

実際、「フジ・ショック」の発表に先立ち、庶民階層が暴動を起こすのではないかと心配された。ところが、「フジ・ショック」への庶民階層の対応は冷静で、大規模な暴動や反政府運動は見られなかった。支持率の推移を見ても、「フジ・ショック」直後にごく短期間の支持率の後退は見られたものの、上層のみならず下層でも支持が回復し、全体としてフジモリ政権に対する支持率は伸張した。選挙前には異なっていたエリート層や中間層と周辺層の考え方が、この時点で一致したことになる。

「フジ・ショック」が経済自由化を柱とする構造調整の前哨戦であることは、既に、広く知られていた。これは「重商主義」を構成していた様々な許認可の排除を意味し、自由競争を望む企業家にとっては好条件だった。規模の違いこそあれエリート層や中間層と周辺層はともに企業家をその内に含んでおり、それらが「フジ・ショック」に対して共通した反応を示した背景にはこうした企業家たちの新自由主義的な経済政策への支持があったものと見られる。そして、こうした新自由主義的な経済政策の導入は、許認可制に基づく「重商主義」の弱体化を意味していた。

日常生活では、周辺層の中に形成されていた互酬的關係に基づくセーフティー・ネットが「フジ・ショック」へのショック・アブソーバーとして機能した。この時期に急増したコメドル・ポプラルには周辺層のみならずエリート層や中間層からの参加も見られるようになった。コメドル・ポプラルはODAやNGOによる援助の受け皿としても好都合で、フジモリ政権はカトリック系NGOを執行機関とした食糧支援などの「緊急社会プログラム」の最末端にコメドル・ポプラルを位置づけた [富田 1993:

3-4]。また、公共部門での人員削減や民間部門での合理化の進展は、それまであまり見られなかったフォーマル・セクターからインフォーマル・セクターへの労働力の流れを生み [富田 1998b: 156-157]、ここでも中間層が周辺層のセーフティー・ネットに頼ることとなった。

こうして、周辺層とエリート層そして周辺層と中間層の間にはそれまで見られなかった社会的隔壁を挟んだ協力関係がそれぞれ形成された。社会的隔壁を挟んだ協力関係は、「重商主義」の弱体化に並行するものであり、「重商主義」の外縁を形作っていた社会的隔壁はそのあり方を変え始めたのである。

5.2.「城壁」の再発見

フジモリ政権は、1991年11月には「小零細企業振興法」(法律705号)を制定した。フジモリ政権による経済の自由化は、それまでの輸入代替工業化に代わって、輸出志向型工業化の必要性を生んでいた。社会的隔壁の外側で形成された労働集約的な製造業は、豊富に存在する労働力への賦存度が高い業種であり、比較優位に基づく輸出志向型工業化にとって好都合な存在であった。「小零細企業振興法」は、企業の規模や課税基準に基づき振興策の対象となる「小零細企業」を定義しており、そこには業種による差別はなかった [Ibid: 151, 161-162]。

ところが、「小零細企業振興法」に基づき、スペインやスイスからの支援を得ながら1994年1月に始まった「小零細企業プログラム」では、振興策の対象となる小零細企業の業種が製造業に大きく偏り、インフォーマル・セクターの代表的業種であったアンブランテ等の小売やタクシー等の交通を対象とする政策はほとんど見られなかった [Ibid: 161-162]。そこでは、輸出志向工業化政策に適合しないアンブランテやタクシーは小零細企業振興の対象からは、実質的に、外されることとなったのである。

このように、周辺層が持つ社会的機能のうち政策的に利用可能な部分では、それをめぐって社会的隔壁の内側と外側とのあいだで協力関係が形成されていた。ところが、政策的に利用することが難しく、しかも既存のフォーマル・セクター企業との競合が心配されるアンブランテやタクシーは、次で見るように別の政策の中でむしろ積極的な排除の対象とされるようになっていたのである。

1991年、かつて「城壁」に囲まれていたリマ旧市街の植民地時代の建築群がUNESCOの世界遺産に認定された。治安状況の改善に伴い、1993年以降、外国からの観光客数は急増し、観光は開発政策の重要な要素とみなされるようになっていた。リマはペルーへの玄関口であり、外国からの観光客の入込数を見ると、その半分以上が

リマを通過している。世界遺産認定に伴い、リマは単なる通過点としてだけではなく、観光地として整備される必要があった。

フジモリ政権は、まず、政治宣伝や選挙キャンペーンで落書きが目立ったリマ市内の壁を塗り替え、街路や公園の清掃を行った。1992年の地方選挙後、リマ市内の行政区でもそうした動きが活発化した。「太平洋戦争」の時に防衛線が敷かれたミラフロレス区は外国からの観光客向けホテルが集まるショッピング街に発展しており、そこでは、それまで観光客相手に民芸品や絵画を扱っていたアンブランテ等の露天商が中央公園から排除され、公園自体も整備された。また、植民地時代の建造物群があるリマ区では、アンブランテを吸収するため庶民市場が整備され、同時にアンブランテの路上での商いが厳しく取締られるようになった。

アンブランテの排除は、フジモリ政権による小零細企業振興の中で注目された繊維関係の小零細企業の集積地ガマラ (Guamarra) でも進められた。ガマラはリマ区に隣接するラ・ビクトリア (La Victoria) 区に位置し、ビルの中に常設の店舗や作業場を持つ企業と街路で営業を続けるアンブランテとの間には、かねてより確執があった。アンブランテの多くは納税を拒否していることもあり商品の価格が安く、しかも街路で営業しているためビル内の常設店舗に比べ客からのアクセスも容易であった [Ibid: 159]。1995年、ガマラの繊維業者組合は、納税義務を履行することと引き換えにアンブランテに倉庫を提供する計画を立てたが、アンブランテ側の賛同が得られなかった [El Comercio 1995]。

街路や公園からアンブランテを排除する措置がとられる時、ミラフロレス区やリマ区に限らず、ガマラの場合についても観光開発のための市街浄化や観光客の安全確保がその理由として引き合いに出されてきた。これは無認可タクシーについても同様であり、ガマラでのアンブランテ排除に先立つ1998年末から1999年初め頃、フジモリ政権はタクシーの認可制を強化し、無認可タクシーへの取締りをはかる政策を打ち出した。ここでも、交通渋滞の解消やタクシーを利用した犯罪の防止のほか、観光客の安全確保がその理由として引き合いに出された。

観光開発のための行われた市街浄化や安全確保は、「庭園の都市」や「太平洋の真珠」という植民地時代に「城壁」の中にあつたリマの姿の復元ともいえ、そのためには、既にリマの一部となりながらも、ペルー革命以降、社会的隔壁の外側で再生されたかの観がある「暴力とゴミにまみれた町外れ」を、更に、目立たないところに押しやらねばならなかった。つまり、世界遺産の認定による「城壁」の再発見は、結果として、庶民階層の中に亀裂を生み、政策的に支援や振興の対象とされる層と積極的な

排除の対象とされる層とを分かťこととなったのである。

この新たな分裂は「納税者」と「納税拒否者」との区分にほぼ対応している。「重商主義」の弱体化による社会的隔壁の変質はその撤去を導くようなものではなく、結局、こうした新たな区分を導くこととなっていたのである。

6. 結 論

ここまでリマの社会構造に埋めこまれた社会的隔壁をめぐるその内側と外側との相互作用を見てきた。社会的隔壁は、たんに分析のためのモデルとして想定できるだけではなく、戦時の陣形などとしてなかば隠喩的に具象化されたり、日常会話の中にそれが反映されたりする、なにがしかの実感を伴う存在でもあった。

そうした社会的隔壁の性格は、オリガルキア体制や「重商主義」といった社会的隔壁内部のエリート層と中間層との間のパトロン・クライアント関係により規定されながらも、それは常に周辺層からの挑戦を受けてきた。ホワイトカラーなどによる挑戦はオリガルキア体制から「重商主義」への変化を導き、「トロイの木馬」に例えられた都市貧困層による挑戦は「重商主義」からその後の新たな社会的隔壁への変化を誘引していた。

こうした周辺層からの挑戦が社会的隔壁内部の社会関係や政策に変化をもたらし得たのは、社会的隔壁を挟んでその内外に分業や協力関係が形成され、そこに生まれた相互依存関係が社会的隔壁外部に対する内部の脆弱性を構成していたからであった。オリガルキア体制では「クラン」がかかわった一次産品輸出と新興企業家たちによる製造業が社会的隔壁の内と外に分業にほぼ対応し、輸入代替工業化と「重商主義」が重なった時期には、フォーマルな企業による資本集約的業種と低所得者層の労働力に頼った労働集約的なインフォーマル・セクターとの分業が見られた。また、「重商主義」が変質していく時期には、「生き残り戦略」やインフォーマル・セクターなどの互酬的関係のネットワークが階層を越えて拡大し、社会的隔壁の内と外で協力関係が生まれていた。

このように、社会的隔壁の存在は、それを挟んで周辺層とエリート層あるいは周辺層と中間層との間に相互作用を生み、そこで繰り返されてきた周辺層からの挑戦とそれに誘引された社会的隔壁内部での変化が、ペルーの政治的ダイナミズムのひとつの淵源となり続けているのである。

参考文献

(洋書)

- Alonso, I.
1989 El Comercio Ambulatorio desde Un Punto de Vista Económico. In Iván Alonso, Fernando Iwasaki, and Enrique Ghersi, *El Comercio Ambulatorio en Lima*. Lima: Instituto Libertad y Democracia (ILD)
- Apoyo S. A.
1990 Principales Problemas del País. *Informe de Opinión (febrero de 1990)*
- Barrenchea, Raúl Porras, et. al
1988 *Historia General de los Peruanos 2 El Perú Virreinal*. Lima: Ediciones Peisa
- Bourricaud, F.
1989 (1967) *Poder y Sociedad*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos (IEP)
- Calderón, J.
1990 *Las Ideas Urbanas en el Perú*. Lima: Instituto de Desarrollo Urbano
- Caravedo, B.
1987 *Lima: Problema Nacional*. Lima: Grupo de Estudios para el Desarrollo (GREDES)
- Castillo, M.
1990 El Círculo Cerrado. De Poder de Grupo a Empresarios y Grupos de Poder. In Cermen Rosa Balbi, Eduardo Ballón, Maruja Barrig, Manuel Castillo, Julio Gamero, Teresa Tovar, and Antonio Zapata., *Movimientos Sociales: Elementos para Una Relectura*. Lima: Centro de Estudios y Promoción del Desarrollo (DESCO)
- Centro de Investigación
1996 *Estudio sobre el Perú (Informe Final) Convenio JICA-CIUP*. Lima: Universidad del Pacífico
- Chávez, E.
1988 *El Sector Informal Urbano: De Reproducción de la Fuerza de Trabajo a Posibilidad de Producción*. Lima: Fundación de Friedrich Ebert
- Cuánto S. A.
1990 *Perú en Número 1990*. Lima: Cuánto S. A.
- De Soto, H.
1986 *El Otro Sendero*. Lima: Instituto Libertad y Democracia (ILD)
- El Comercio
1995 5月2日付
- Golte, J.
1987 *Los Caballos de Troya de los Invasores*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos (IEP)
- Huaman, J.
1988 Economía y Organización en los Comedores Populares. In Nora Galer, and Pilar Nuñez eds. *Mujer y Comedores Populares*. Lima: Servicios para el Desarrollo (SEPADE)
- Instituto Libertad y Democracia (ILD)
1989 *Compendio Técnico y Estadístico de "El Otro Sendero"*. Lima: Instituto Libertad y Democracia (ILD)
1990 *El Transporte Urbano de Pasajeros en Lima*. Lima: Instituto Libertad y Democracia (ILD)
- Iwasaki, F.
1989 Aproximaciones Hacia Una Historia Social: El Comercio Ambulatorio en la Lima Colonial. In Iván Alonso, Fernando Iwasaki, and Enrique Ghersi, *El Comercio Ambulatorio en Lima*. Lima: Instituto Libertad y Democracia (ILD)
- Matos Mar, J.
1988 *Desborde Popular y Crisis del Estado*. Lima: CONCYTEC

McClintock, C.

- 1999 Peru: Precarious Regimes, Authoritarian and Democracy. In Larry Diamond, Jonathan Hartlyn, Juan J. Linz, and Seymour Martin Lipset, eds. *Democracy in Developing Countries Latin America*. Second Edition. London: Lynne Rienner Publishers

Miller, L.

- 1987 La Mujer Obrera en Lima, 1900-1930. In Steven Stein ed. *Lima Obrera 1900-1930 tomo2*. Lima: El Virrey

Ortega, J.

- 1986 *Cultura y Modernización en la Lima del 900*. Lima: Centro de Estudios para el Desarrollo y la Participación

Pacheco, C.

- 1985 *Memoria y Utopía de la Vieja Lima*. Lima: Univesidad del Pacífico

Tovar, T., and Zapata, A.

- 1990 La Ciudad Meztiza. Vecinos y Pobladores en el 90. In Cermen Rosa Balbi, Eduardo Ballón, Maruja Barrig, Manuel Castillo, Julio Gamero, Teresa Tovar, and Antonio Zapata., *Movimientos Sociales: Elementos para Una Relectura*. Lima: Centro de Estudios y Promoción del Desarrollo (DESCO)

Valcárcel, C., Docafe, E. et. al.

- 1988 *Historia General de los Peruanos 3 El Perú Republicano*. Lima: Ediciones Peisa

(和書)

遅野井茂雄

- 1995 『現代ペルーとフジモリ政権』 アジアを見る眼 91 アジア経済研究所

富田 与

- 1991 「庶民階層の政治参加とフジモリ政権」『ラテンアメリカ・レポート』10(3):2-9
1997 「インフォーマル・セクターの位置づけとその振興策」『四日市大学論集』9(2):109-138
1998a 「製造業」『ペルー国別援助研究会報告書 現状分析編』国際協力事業団、69-91
1998b 「インフォーマル・セクター」『ペルー国別援助研究会報告書 現状分析編』国際協力事業団、147-168

増田義郎・柳田利夫

- 1999 『ペルー 太平洋とアンデスの国 近代史と日系社会』 中央公論社